

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 145 回 恐縮ですが、藤原正彦氏に物申す！

2006.4.16

「国家の品格」(藤原正彦著、2005.11.新潮新書刊)という本が話題を呼んでいる。ニュースリリース風に言えば、以下のようなになる。

「日本は世界で唯一の『情緒と形の文明』である。今の日本に必要なのは、論理よりも情緒、英語よりも国語、民主主義よりも武士道精神であり、『国家の品格』を取り戻すことだ。全ての日本人に誇りと自信を与える画期的日本論」ということになる。大変なベストセラーゆえ、すでにお読みになった方、たくさんいらっしゃると思う。

この本の書評をあえて述べるつもりは毛頭ない。が、最近本屋へ行くと、何となくこの手の論調風の本が、店頭には山と積まれている。

「飯島賢二のコラムも、藤原氏の考え方と似ている」...先日あるところで、こんな感想を頂いた。小生、驚愕のあまり、今回弁解の弁を書かせていただくとした。まず、国家の品格どころか、著者の品格が大違いと言っておこう。新田次郎、藤原ていを両親に持ち、東大理学部を卒業後、ケンブリッジに留学する経験を持つ数学者、お茶の水女子大理学部教授とは、素性、経歴、知識から全く比較にならないこと、断言する。

藤原氏の原点は両親の影響が大きい、思想的には、新渡戸稲造、内村鑑三、福沢諭吉、そして民俗学の宮本常一と言われている。そういえば、いずれも我が書齋に、愛読書として何冊も並んでいる著者である。特に宮本先生は、大学卒業後、一緒に仕事をすることがある。小生の職場は近畿日本ツーリスト(株)東京本社の近旅連(近畿日本ツーリスト協定旅館連盟)経営相談室。その隣が民俗学研究所で、スタッフが足らんということで、宮本先生と一緒に日本各地を回り調査をした経験がある。多分、そんな関係から、おのずと考え方は似通っているのかも知れない。

日本の古来からの伝統、文化を見直し、本来あった日本人としての誇りと慈悲の精神を呼び戻そうと、浅学未熟な小生ながら、訴え続けている。「国家としての品格」を正したいとは、全くその通りである。今の日本人にそれが何で欠落したか...実は、ここが大きな問題点で、その原因を追究し解決策を模索する姿勢が重要であること、間違いない。

英語が必要ない...英語がペラペラな藤原氏はそんなこと思っていない。しかし、品格をなくした原因を短絡的に民主主義、あるいは資本主義の経済活動に求めるのはいかなものか。「諸悪の根源が儲け主義」的発想は、勤勉で礼法を重んじる日本人に、昔からあった思想である。だが、儲け主義に邁進しない経済活動もあること、分かって頂きたい。その貴重な思想が希薄になった...それは由々しき事態である。それこそ「何とかしようよ」と訴え続ける必要がある。しかし、民主主義、あるいは資本主義がイコール「悪」では決してないこと、藤原氏とは一線を画したい。